

少国民も必死だった！

—子供が体験した戦争と引揚げ—

石川県 坂田謙一

一 親子三代終戦までの生活

私の祖父である源治郎は、日本海に臨んだ寒村の石川県石川郡蝶屋村ちやうや（現在の美川町）で、十人兄弟の三番目として生まれ育ったが、明治時代における農漁村の通弊である閉ざされた環境にいたたまれず、男子一生の夢を大陸への雄飛にかけて、朝鮮半島に渡った。大正の初めから昭和にかけて、故郷とは日本海を隔てた対岸の地・元山で銭湯屋を営み、その傍らに不動産業も手掛けて、ひとかどの成功を収めていた。

そのもとで育った父の源市は、元山中学時代には喫煙がもとで中途退学をさせられたほどの猛者だったが、私から見る親としての父は、寡黙ながらも頑健で頼り甲斐のある人だった。当時は郵便局

に勤めていて、電話線敷設の測量技師をしていた。

母・しづいは、父とはいとこ同士で、十八歳のときに嫁いだ。祖父の実家から程近い農村の出で、それまで村から一步も出たことのない身ながら、石川からの遠路を単身で嫁入りしてきたのだった。敦賀港からは貨客船に乗り、あちこちの港に立ち寄りながらの航海をして五日目に元山港に着いたということだった。内輪だけとはいえ、当時元山で一番の料亭で結婚式を挙げ、周りへの挨拶もそこそこにして、父の任地だった朝鮮半島の東海岸江原道の注文津へ赴いた。丸一日かかる汽車の旅で、これが父と母の体のいい新婚旅行となった。それから一年後に、この地で私が出生することになったが、それは昭和八（一九三三）年四月四日のことである。

その後、日本海寄りの長箭チャンゼンから城津ジョウジンへ、そして果ては鴨緑江岸オウリョクコウの恵山鎮ケイサンチンまでの各地を転々とすることになったが、その間に私を頭に三男二女の子宝に恵まれた。

恵山鎮では、程近くに白頭山ビヤクトウサンがそびえていて、当時既に山中を根城にしていた金日成が抗日パルチザンとして鮮満国境で暗躍していた。日本の守備隊がたびたび襲われたし、父たちが危険を冒して張った電話線が、一夜を待たずに切断されたこともあった。「白頭山の虎」といわれて恐れられていたのである。私は、そのように治安の悪い恵山鎮の小学校で、入学式を迎えることになった。

父は、あまりに頻繁な転勤に嫌気が差したのか、祖父一家が永住している元山に戻り、そこにある朝鮮石油株式会社に転職することになった。元山海軍航空隊近くの広大な敷地に石油タンクが林立していて、油槽船が接岸できる専用埠頭も有していた。工場の近傍に社宅が立ち並び、私たち一家はそこに入った。

私は、元山泉町いずみまち国民学校四年生に転入したが、その学校は歴史も古く、丘に囲まれた総赤レンガの校舎がひときわ目立っていた。全校生徒合わせて千五百人ぐらいであり、各学年は白組(男子組)、

青組(男女組)、赤組(女子組)の三クラスに分かれていて、私は共学の青組となった。

昭和十六年十二月八日に勃発した太平洋戦争もたけなわとなつてきて、クラスでの遊び仲間も、「海兵組」と「予科練組」とに分かれて、何事によらず対抗意識を燃やしていた。海兵組は、勉強は得意としたが体育は劣り、予科練組はその逆だった。文武両道はやはり至難の道であった。

そのような環境の中で、街うらにある旅館の子Y君とは海兵組の同志となり、そして無二の親友になった。旅館へ毎日のように遊びに行っていたが、そのうちに元山航空隊の海軍中尉さんと仲良くなった。中尉さんにせがんで、武勲話をよく聞かせてもらった。「当元山航空隊は、戦争初頭のマレー沖海戦に出撃したのだ。ジョンブルの誇る不沈戦艦プリンス・オブ・ウェールズに向かった元山空の『九六陸攻』九機は理想的な挟撃作戦に成功した。この海戦が戦艦と航空機の優位性が逆転する最初となったのだ！」と、中尉さんの話は

熱を帯びていた。中尉さんの母校、江田島の海軍兵学校の話もよくしてくれた。「入校は難しいよ。勉強も大事だが体力も強くなければ」そんなことを耳にしなから、私たちはなお一層奮い立ったものだった。

折しも、ブーゲンビル上空で、連合艦隊司令長官の山本大將が戦死された。あこがれの海兵の大先輩、山本五十六軍神の残された言葉が「不惜身命」だった。昭和十八年六月東京の日比谷公園で国葬が行われたその日、Y君と二人で勉強部屋に閉じこもった。二人で指先に血を含ませて、半紙に向かい「不惜身命」と書いた。私たちはこれを勉強机の正面に貼って座右の銘とし、日夜眺めることになった。

そんな決意を持って毎日を過ごしていたが、昭和二十年八月の暑い夏の盛り、天を覆すような事態が起こった。思いもしなかった日本の敗戦という結果で終戦を迎えた。国民学校の最上級生であった私たちは、夏休み中とはいえ、週番を命ぜら

れていたので登校していて、松根油の原料として採取した松の枝や幹の仕分け作業にあたっていた。その日も炎暑で、校庭は焼けつくようだった。

昼さがりのこと、急に招集太鼓が鳴った。私たちは何ごとかと話しながら、汗を拭き拭き正面玄関の廊下に整列した。週番生の前に立つのは、校長先生と、教練教官だったが、二人の目は真っ赤である。「先ほど天皇陛下の玉音放送があつて、戦争は終わった。無念だが……」と、校長先生は言つて絶句した。校長先生の横で仁王立ちになつていた教練教官が、いきなり大太鼓のところに駆け寄るや、「負けてなんか、なるものか！」と、大声でわめきながら太鼓を打ち続けた。教官の顔から汗があたりに飛び散った。私たちは、何事が起こつたのかと身を硬くして立ちすくむだけだった。少年の目には、あまりにも異様な光景だった。

## 二 この日が始まり

「戦争は終わった。日本は敗けたのだ！」と言われても、多感な少年の胸ではにわかになんか納得でき

なかった。

振り返ってみるに、この戦争が始まったとき、私は国民学校二年生だった。「米英撃滅」の名のもとに、「欲しがりません勝つまでは」の掛け声に駆り立てられて、私たちはつらいことも悲しいことも忘れて、少国民として恥ずかしくないよう生きてきた。正義の戦だと信じこんでいたからだ。「昨日まで、大人たちが声をそろえて叫んでいたことは何だったのか」と、わなわなと震える思いで心がいっぱいになっていた。

校舎を出て、夏の日が照りつける校庭を横切り校門を後にした。これが、校門をくぐる最後になるうとは知る由もなかった。学校前の坂道を下ると裁判所前が出る。朝鮮の人たちが、日の丸の旗を塗り替えて、朝鮮旗に急ごしらえして「マンセイ！ マンセイ！」と叫んでいる。つい先ほどまでは、考えられもしないような街の光景であった。この日を境にして、外地の状況は目まぐるしく変わろうとしている。子供心にも、いや応なく肌身

に感じるのだった。

父の勤め先である朝鮮石油も閉鎖されて、社宅も追い出された。私たち一家七人は、市街で銭湯屋を営む祖父の家に身を寄せることになった。

その祖父だが、たまたま亡き祖母の納骨のために一年ほど前に帰国していたが、元山に戻るころには閩釜連絡船が空襲の激化により運航をしなくなり、郷里に足止めされていた。このことが、結果的には祖父が引揚げの辛苦を免れることになったのである。

銭湯「大黒湯」だいこくゆは、風呂たきとして雇っていた朝鮮人の平沼さん一家が営業を続けていて、祖父の留守を守ってくれていた。二階の四部屋には私たち親子七人、社宅での隣人であった石田さん夫妻、それに鉄道官舎を追われた父の従弟の福留さんが加わって、十人の大世帯となった。

八月二十一日の早朝。赤旗をひるがえしたソ連艦隊は、巡洋艦、駆逐艦、輸送船などの艦艇多数をもって元山港に入港し、陸兵約九、〇〇〇人を

元山周辺に上陸させた。これに対峙する日本軍は約八八〇人の陸軍と、元山航空隊の約四、二五〇人の海軍。その他の部隊を合わせて約一〇、〇〇〇人で、一触即発の様相だったという。だが、日本人居留民の安全を考えたのか、翌二十二日には一発の砲火を交えることもなく武装解除が行われたのである。

終戦時に元山に住んでいた日本人は約一四、六〇〇人で、それに北から南下してきた避難民が加わって、元山市内は日本人であふれていた。市内のあちこちにある寺院の御堂は難民収容所になり、境内には自炊の煙りが立ち昇っていた。発疹チフスなど伝染病の発生も聞かれるようになってきた。こんな状況の中で「日本人世話会」が結成された。軍のような権力もなく、官のような組織もなかったが、ただひたすら同胞愛に燃えての苦難の仕事であった。

折から元山港にはソ連船が続々と入港し、旧日本軍の残した軍需物資や各工場の設備や機械類、

それに民間人に供出させたラジオや自転車まで、あらゆる物資を船積みしてソ連本国へ運んでいたのである。そして船積みのための使役に駆り出されたのが、働く場所を失った日本人だった。無職をかこっていた石田さんや福留さんは、連日のように埠頭に行つて働いていた。

しかし、父は四十歳過ぎてから初めての召集で厳しい初年兵教育を受けたことが、年齢的にも肉体的にも苦痛だったようで、半年前に除隊したのだが全体に衰弱していて、その表情は生気を失っていた。かつての偉丈夫だった面影は全然見られなくなっていた。終戦後の混乱のさなかに、父は急性肋膜炎を発病していたので、使役などには出られる由もなかった。銭湯屋からの収入が当座の生活費となっていた。

私たちの泉町国民学校は早くから閉校になり、校舎はソ連軍の病院になった。生徒たちはなすべもなく無為に日々を送っていたが、日本への帰国が閉ざされたことを知ると、三三五五と港に集

まるようになった。水平線の彼方は日本内地だ。故郷に一步でも近づきたい気持ちでそうさせたのだった。岸壁に腰をおろし、肩を寄せ合うとだからともなく口ずさみだして、やがては合唱になったのが、小学校唱歌の「ふるさと」だった。「兎追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川……」と歌うほどに、優しく温かな故郷の風景に包み込まれるような思いだった。未知の日本内地の様子を思い浮かべながら、私たちは来る日も来る日も、同じ曲を水平線に向かって歌い続けていた。

そんな友も、日が経つにつれ一人減り、二人減りしてきて、周囲が心細くなっていった。秩序を失った街での不安な明け暮れ、息をひそめてうかがう外の気配など陰うつな生活に、人々はいたたまれず、長年住み慣れた我が家を捨てて、ここを脱出して行ったのであろう。私たち一家といえ、小学六年生の私を頭に、二歳の末弟まで三男二女の子供がいる。かてて加えて病身の父。気丈な母がいるにしても、知らぬ山河をさまよい歩くなど

無謀としか言いようがない。明日のことさえ定かでない不安なままで、厳しい北朝鮮の冬を迎えようとしていた。

### 三 生きるために

北朝鮮の冬は実に厳しい。零下十度以下の寒さが連日のように続いた。この元山に元々住んでいた者はまだしも、以北から脱出してきてこの地で足止めされている避難民の人たちは難渋していた。寒空のもと、隙間風にさらされているお寺の御堂などで、不自由な生活を強いられていた人のなかには、飢えと寒さで倒れる人も多かった。看病の薬はおろか、栄養補給もままならぬ悲惨な有様だった。地元の日本人も世話を通じていろいろと手助けに努めたが、どうにもならなかった。明日はわが身であろう不安な日々であった。

街のあちこちで、ソ連兵の姿が見られるようになった。綿入れのような分厚い軍服を着て、丸い弾倉の付いたマンドリンと呼ばれていた自動小銃を肩に掛けて、いかめしい顔つきで歩いていた。

子供といえども、ときには威嚇のため小銃を向けられることもあった。大人たちは、腕時計を強奪されたり、乗っていた自転車を取り上げられたりした。自転車に乗るのは初めてなのか、大の男が危なっかしい格好で乗っている光景などが見られた。

私たちの学校はソ連軍の病院になったが、食堂のスープを運ぶバケツを見て、陰で苦笑いをしていた。そのバケツの外面に「西便所清掃用」と書かれていたからである。知らぬが仏とはこのことを言うのか、往時を思い出すときに必ず話題になるバケツのエピソードである。

軍人の家族も見られるようになり、ソ連の子供たちからロシア民謡を習ったりした。「ロスビダニヤ、ヤマニグルツシ。ポプリット、マネダレコイ。ナベソーキ、ナベクルトイ」これはあの有名な「カチューシャ」の歌詞である。歌には文字どおり国境はなかった。日本人とロシア人と、それに朝鮮人も混ざって、子供たちの歌声が街角を流

れていた。こんなことが縁になって、ソ連兵の隊舎でアルバイトをする級友もいた。ボーイとして薪割りや皿洗いの仕事だったが、時には兵隊たちから「ウォッカを飲め飲め」とはやし立てられて、閉口したと話している級友もいた。

祖父が営んでいた銭湯屋「大黒湯」も、そのころになると風呂焚きを請け負っていた平沼さんの手に渡り、その二階に私たち十人が同じ屋根の下に肩を寄せ合っていたわけである。いつ踏み込んできて来るかも知れぬソ連兵の軍靴の音におびえながらも、半ば開き直った楽天的な空気がただよっていた。福留さんなどは鉄道員で、奥さんを専用列車で早々に帰国させていた気軽さもあつて「明日のことは気にしないで、気楽にやりましょうよ！」などと言う有様だった。これも今までに培われた大陸的な大らかさであろう。

石田さんと福留さんは、ソ連軍の没収物資を積み出す埠頭での使役に従事し、米や雑穀類を賃金の代わりにもらって帰るといふ毎日だった。病身

の父は、部屋に座して巻きタバコの手作りに精を出していた。闇市で買い求めてきた葉タバコを刻んで砂糖水などで味付けし、それを使役でくすねてきた紙ロールに即製の手巻器を使って一本ずつ手作りするのだが、煙草好きの父はそんな仕事を楽しげにしていた。それを十本ずつテープで束にして、路頭に立って売りさばくのが私たち兄弟の役目だった。早々に売り切れたりすると、子供心にも商いの喜びを感じたりした。

夜になると、我が家の大人たちは、「花札」に打ち興じていた。暇にまかせてボール紙を切っては、せつせと絵柄を描いて作った手製のカルタである。外をはばかりて電灯に黒い布をかぶせて、戦時中の灯火管制を思わせるようななかで、大人たちのささやかな慰みのひとときで、明日をも知れぬ夜を過ごしていた。

階下の銭湯が開く前に、その一番風呂に入浴できることが、私たちに残されていた最後の特権であった。そんな日常生活でも時の流れは厳しくな

っていて、ある日平沼さんから「今後は、私の旧名の朴と呼んで下さい」という申し出があった。

平沼さん一家五人は、裏の離れに寄り添うようにして長年暮らしていた。私と同年のテイちゃんとは、幼いときから燃料置場のおがくずにまみれて、よく遊んだものだった。取っ組み合いをする時、腕力は私より強いはずなのに、なぜかいつも負けてくれた。このことの意味を、私は後になつて気づくのだが、テイちゃんから堪え忍ぶことの峻烈さを身をもって教えられたような気がする。

ソ連当局は、ことあるごとに「日本人は働け、時期がくれば荷物を持たせて帰してやる！」などと公言していたが、何らの動きもないままに終戦の年を越した。避難民ばかりでなく、元山周辺で日本に帰れる日を待ちわびていた日本人は、栄養失調や発疹チフスなどの伝染病で多くの犠牲者を数えた。火葬場も閉鎖されていて、近くの山腹に埋葬するしか手立てがなかった。それも厳寒のさなか、凍土は渾身の力を込めて打ち込むツルハシ

を受け付けなかった。線香とてもままならず、マツチを擦って霊前に手向けた。

冬を越し、結氷もゆるむ春の気配がしてくると、しびれを切らした日本人は、座して死を待つよりはと、自分の足を唯一の頼りにして南下をし始めたのである。私たち一家にも焦燥感が漂い始めてきた。

#### 四 三十八度線を脱出するまで

今、私の手元に古ぼけた手綴じの手記がある。ザラ紙の表紙には「国境線北緯三十八度脱出血涙記録」と、墨書されている。いかにも仰々しい題名だが、これは当時の担任の先生から付けていただいたものだ。私は終戦の翌年、昭和二十一年の春に引き揚げてきて、郷里の小学校の六年生に転入した。異郷からの新参者として居心地の悪い思いをしていたが、担任のS先生から「自分を皆に知ってもらうために、引揚げ体験を発表してみろ」と言われ、その時期は秋の学芸会がいい機会だと促された。記憶が生々しいうちに、私は早速に

書き始めた。

家族七人が住み慣れた我が家を後にした四月十九日から、北緯三十八度線を越えた四月二十五日までの七日間のことを日記風に綴った。S先生も自ら筆を執られて、題名を書いてくださった。

そしてこの記録は、昭和二十一年十一月二十九日に開催された村立蝶屋小学校の学芸会で、私が朗読してみんなに引揚者の労苦を知ってもらい、やっと級友からも理解を得たものであった。

脱出してから七カ月も経っていない、昭和二十一年十一月のことであった。記憶が鮮明な時に書いた生々しさと、十三歳の眼に映った脱出のありのままを、少年の言葉で伝え残したいと考え、あえてそのままをここに記すこととした。

#### 『国境線北緯三十八度脱出血涙記録』

四月十九日 晴

外出先より五時に帰宅した。帰ってみると「日本人世話会」という腕章をつけた人が二人きてい

る。何かかと思っていたが、後で聞いてみると、「内地に帰れるんだよ！」というこゝろで、聞いてみてびっくりした。僕は、もう二度と故郷の土は踏めないと思っていたので夢でないかと疑った。しかし、それは間違いなく待ちに待った帰国の知らせだった。だが、実のところは正式の引揚げではなかった。

「今晚の九時までに東本願寺に集合せよ」という指示だった。もうあと三、四時間の猶予しかない。大きな荷物は持って行かれないので、着替えやローソク、マッチ、食糧などの必要最少限の品物を、四つのリュックサックにぎっしり詰めた。夕飯もそこに済ませ、名残り惜しい我が家を後にして集合場所へと急いだ。お寺に一泊するのだ。他の人も沢山きていて、そのなかには顔を知った人もいた。その夜は、嬉しさのあまり少しも寝られなかった。

四月二十日 晴

長い待ち遠しい夜がやっと明けた。朝の食事を

済ませ、境内にみんなはきちんと身支度をして集合した。みんなそろったので駅へ向かった。駅前の広場に僕たちと一緒に行く日本人が山のようにいる。話によると二千人ほどの人だそうだ。

しばらく経って有がい貨車がホームへ流れ込んできた。この汽車に乗るのだ。改札口には、ソ連軍の憲兵が銃を持って物々しく立っている。

ここを通過すると、僕たちは手をつないで汽車へと走った。さあ乗るのだ。乗る人で、とても混雑している。向こうでは、小さい子供の声。「母ちゃん」という悲鳴があつちにもこつちにも。また、親たちははぐれたわが子を悲痛な叫びで呼んでいる。みんなにはさまれて、「死ぬよ！」といって泣き叫ぶ子供もいた。

僕もやつと乗った。見渡すと父母、弟妹はみんな乗っていたので安心した。もちろん座ることはできない。僕はリュックサックを下にして立っていた。ほとんど全員乗ったので大分静かになった。僕たちの乗った貨車はいっぱいになったので、重

い戸をがらりと閉めた。中は真つ暗だ。それで小さな窓を開けた。こんなにさわいでいるのもしらないで、汽車はのんびりと、「ポー」と発車の汽笛を全列車に鳴り響かせた。

汽車は音もなくレールをすべり出して、だんだんと速度を早めた。鉄柱の窓の前を、電柱が一つ二つ三つと通り越す。車窓から見える我が家は小さくなってゆく。町の軒々はすんずん遠ざかって行く。「思い出多き元山よさらば！」車内の人たちは、ただ沈黙しているだけだった。

わが列車は一駅二駅と京元線クイゲンセン(京城(ソウル)―元山間の路線)を矢のようにひた走りに走った。窓外の風景は田にかわり、町にかわり、野には蝶々が舞い飛んでいる。山の色は内地の山のように青々としていない。朝鮮の山は、はげ山である。木を切つて燃料にするからだ。

もう太陽も西の山に傾いている。六時ごろであろうか、ある大きな駅に停車した。なかなか発車しないので心配でたまらない。薄暗くなつても発

車しない。父の話によると「ソ連兵がここから先へ汽車を走らさんのだ」とのことだった。

かなたの山の上を、今しも月が昇らんとしている。僕たち一家は夕飯のにぎりめしを食べていた。そのときでした。あの重い貨車の戸が開いて、そこに二、三人のソ連兵が銃を持ち、ローソクで車内を隅から隅まで見渡している。みんなの顔がローソクの火で不気味に光っていた。みんなはただ黙つてソ連兵を見守っている。すると、「ノー・ヤポンスキー」と、兵隊の口からもれた。「お前たちは日本人か！」というのである。そう言つて行つてしまった。恐ろしい瞬間であつたが、僕はほつとした。

そう思う間に僕はいつのまにか寝入つてしまつた。一晩、汽車の中で泊まつたわけである。寝るといつても、ただ中腰でリュックサックにもたれかかるのです。ソ連兵の撃つ銃声を聞きながら寝た。

四月二十一日 晴

とうとう一夜を貨車の中で過ごした。ご飯はホームで石や木を集めてきて焚いた。根っこめしたつたが、おかずは缶詰である。昼前はホームで遊んだりした。

昼から日本人世話会の人「この汽車は、このまま元の元山へ帰せ」とのソ連軍の司令官から命令があつたと知らせにきた。みんなの落胆はひととおりでなかった。僕は涙が出るほどがっかりした。僕たちはこのままどうなるのでしょうか。父と母は相談して「今晚この町を逃げ出して、歩いて国境線を突破しよう」という決心をつけたのです。年寄りや歩けない人がいる家族は、そのままその汽車で元山へと帰って行った。とり残された僕たち七百人ほどは、日の暮れるのを待って駅のホームを飛び出した。みんなで手をつないで暗闇の町を一目散に走り、町はずれへと向かった。

後の方で「待てえ！」という声と銃声が聞こえる中を、一里ほどかけ抜けた。やっと町はずれに

出て、僕たち五十人ほどの集団は、朝鮮人の家に泊めてもらう。そこは、とても親切であつた。

四月二十二日 晴

朝早く、その部落を出発した。見渡せば広い広い高原である。とても気持ちがいいなあ。

弟の義昭は十歳だが、百米ほど先を歩いて行く。あの小さい六歳になる妹・千恵子がとても張り切つて歩いている。僕の前を行くどこかのおばさんは主人がいないらしく、リュックサックをかっつき、その上に赤ん坊を乗せ、胸の前にも荷物を下げている。両手に三つぐらいの子と六歳ぐらいの子の手を引いて歩いているが、くたびれたのか泣き泣き歩いている。親は「もう少したよ。泣かないで歩きな！」と、だましすかしするけれども泣き止まない。親のつらさはどんなであろう。

昼からは、とても暑くなり、リュックサックをかついでいる背中が汗でべとべとである。身体中がとても重い感じがする。

大分歩いた。山の下に町が見えてくる。鉄原テッゲンと

いう町らしい。そこには、きつとソ連兵がいるので遠回りして、町の中を通らないようにして歩いた。

日が西の山に傾きかけた。今日は八里ほど歩いた。あの六歳の千恵子が最後まで歩き通したのは、自分の妹ながら感心した。

今夜も、朝鮮人の部落で泊めてもらうことになった。晩ご飯までごちそうになる。夜は、その人に明日の行程の地図を書いてもらい、早々に土間で横になった。

四月二十三日 晴のち雨

朝四時に起き、出発の用意をして、その家に厚くお礼を言ってそこを立った。昨日はよく歩いたせいか、とても足が痛い。でも我慢しよう。南へ南へと足を進めた。

ある部落で、朝鮮保安隊の前を通り抜けようとしたとき、建物の中から隊員がばらばらと出てきて「みんなちよつと待て、調べるから！」と言って呼び止められた。庭に入ると「どこから、どう

やってきたのか？」などと、大人の人たちにいろいろと聞いていた。荷物を検査して、自分たちの必要な品物や書類などを全部取ってしまった。検査が終わると、またそこから目的地を目ざして歩き始めた。部落を通ると、朝鮮の人たちがめずらしそうに僕たちを見ている。

歩くうちにだんだん山道になってきた。山がけわしいので登るのがとてもきつい。千恵子が疲れてきたのかぐずりだしたので、父が抱いて歩いていた。日が暮れようとしてきたので、山腹で夕食を作ることになった。焚木を集め、かまどは石をひろって作り、米は谷間の冷水で洗い、ご飯を焚いた。谷間の水はとても冷たかった。今日もおかずは缶詰だ。生魚を食べたいなと思った。

晩の食事を済ませて、暗い中をまた歩き出す。森の中から、いつの間にか道に迷ってしまったが、僕たち四十人の一団は、ただあてもなく前進を続けた。闇の中、前を行く人さえ見えにくくなってきた。またひとつ僕たちにわざわいが待つ

ていた。

空には雨雲が出てきて、そのうちにぼつりぼつりと降りだしてきた。ますます前が見えにくくなって危険だ。道のすぐ横は谷です。前に進むこともできなくなり、その場で野宿です。家族七人ひとかたまりになって、草の上に座った。母は毛布を背から下ろし、僕たちにかぶせてくれた。父も母も黙ってぬれている。

三時間ほど、身動きもできずうとうとと眠っていた。このままでは、みんな風邪を引いて死んでしまうと言って、大人の人が雨をしのぐような所がないか、探しに行った。しばらくすると「小屋が見つかったぞ!」と、嬉しい知らせ。炭焼き小屋である。着る物がびっしりよりで寒いので、小屋に積んである焚木を次々と燃して暖をとった。みんなは、そこでごろ寝をした。

四月二十四日 晴

みんなのさわぎ声に、はっと目がさめた。僕たちにいる所はよほど高い所と見えて、すぐ目の前

を層雲が立ちこめている。道がわかったので山を下りる。服がしめっているのでもとても寒い。太陽が雲をかきわけて昇ってきて、あたりを輝き照らし始めた。鳥の声があちらからもこちらからも聞こえてくる。山の朝だ。道端の露がまぶしいほどに光っている。

平野に入ると、部落をいくつも通過した。その度ごとに荷物を調べられ、減っていった。あるときなど、ひどい人がいて「日本人にうらみがある」と、指揮者の人がなぐられることもあった。

昼過ぎ広い川にさえぎられ、渡し舟に金を払って向こう岸に渡った。午後三時ごろ、けわしい山に出くわした。傾斜が急で、高さは約三百米ほど。僕たちは手を取り合って、はうようにして登った。時にはリュックサックの重みでずり落ちることもあったが、がんばって、がんばってようやく頂上に立った。

八歳の妹幸子が「兄ちゃん、国境線の川が見えるよ!」と、父に教えられて叫んでいる。僕は嬉

しくて万歳をした。山の下には、川が蛇のように曲がりくねって流れている。喜びで疲れも忘れてしまう。僕らは喜び勇んで下山した。ふもとはだれもない小屋があった。そこで夜の来るのを待つことになった。暗い夜に脱出しないと、日中はソ連軍の警備兵に見付かると捕らえられるか、殺されるかするからだ。

夕食を取り腹ごしらえをして、夜の更けるのを待った。午後十時ごろそこを出発、いよいよ国境線へと向かう。目の前に川が薄ぼんやりと見えてくる。その幅は七、八十米であろうか。すぐ近くで、突然に犬がほえる。同時に後方から銃声。草むらに伏して、家族七人が帯で結び合う。さあ、行こう。父を先頭に流れに入ってゆく。深さは僕の腰ほどだ。必死に足を前に出す。下流に流されながらも、妹たちも必死に水にもがいている。母が未っ子の二歳の博道を背に負いながら、最後に続く。岸にはい上がると、でこぼこの荒地を死にものぐるいで走った。何べんも転び、また起きて

は走った。遂に国境線を突破したのだ。みんな抱き合って、嬉し泣きに泣いた。

ひるまず前進した。またもやすごい山に出会った。前の山よりけわしい山だ。登っては休み、休んでは登った。休んだときは、ひとりでに眠ってしまう。また、起されて登った。とうとう頂上につく。こんどは下山だ。ものすごい坂で、すべるようにして下った。後から思うと、よくもあんな高いけわしい山を登れたものだ。夜で何も見えなかったからこそ登れたので、昼であつたらとても登られなかったかもしれない。

もう安心だ。米軍が管轄する領地に入ったのです。ぞろぞろ歩いていると、向こうからジープが走ってきた。そのとき、初めてアメリカ兵を見た。ソ連兵とは違う感じだ。

ある警察署に着いたので、いろいろと今までの事を話すと「明日、トラックを回すから、それに乗って京城へ行け」とのことだ。その夜は、町の宿屋でまんじりともせず喜びの一夜を過ごした。

四月二十五日 晴

朝早く起きて、六歳の妹に「内地のばあちゃん  
の所へ行けるのよ」と言うと、目に涙をためてい  
る。故郷の土をふむ夢が実現するのだ。何日も苦  
労して、無事にたどり着いたことを思うと夢のよ  
うな気がする。空では太陽が、にこにこ笑って僕  
らと共に喜んでいるようです。

僕たちの喜びと疲れを満載したトラックは、一  
路京城へ京城へと邁進した』

以上が、小学校六年生のときに書いた『脱出記  
録』であるが、これを読むと当時のことが彷彿と  
して思い出される。

##### 五 博多港に向かう

その日夕刻、京城の日本人難民収容所である東  
本願寺に着いた。そこで、元山の「大黒湯」を、  
私たちより三日後に出発した石田さん夫妻と再会  
したが、まったくの奇遇であった。

数日後、京城から貨物列車に乗せられ釜山港へ

向かう。そして、第二の故郷といえる朝鮮半島を  
後にすることになったが、父や母もさぞかし感慨  
はひとしおであったであろう。

釜山港から引揚船に乗り、博多港に向かった。  
私たち親子三代の植民地で汗水垂らして働いて得  
た遺産は、背中のリュックサックだけであった。  
しかし、「国敗れて山河あり」船上から故国の山影  
を望んだとき、「もう何もいらぬ。平和に暮らせ  
るだけでいい」と、しみじみ思った。